

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	上級日本語学習者のための読解教材：芥川龍之介「羅生門」教材化の観点
Author(s)	池田, 庸子
Citation	茨城大学留学生センター紀要, 4: 23-31
Issue Date	2006-02
URL	http://hdl.handle.net/10109/153
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

上級日本語学習者のための読解教材

—芥川龍之介「羅生門」教材化の観点—

池田庸子

要 旨

本稿では、芥川龍之介の短編小説「羅生門」の教材化を試みた。まず、日本語教育においてどのように文学作品が教材化され、授業で用いられてきたか調査し、先行研究をもとに文学教材の可能性について検討した。次に、「羅生門」の教材としての意義について述べた。そのうえで、作品をいかに読むか、作品から何を学ぶか、どのように読みを深めることができるか考察した。

【キーワード】文学教材、読解、教材化、小説

1. はじめに

実用本位の外国語教育が主流となっている昨今、虚構の世界を扱う文学作品は非効率的なものとして敬遠されている観がある。限られた時間の中で日本語を教える教師にとっても、簡潔に書かれた新聞記事や論旨のはっきりした社説のほうが授業で扱いやすいのも事実である。しかし、日本語学習者の知的好奇心を満たし、読解力を高めるために文学作品は重要な役割を果たすと筆者は考える。文学作品が教材として敬遠される理由にはさまざまな要因があるであろうが、その一つに文学教材の特殊性がある⁽¹⁾。数ある作品の中からどの作品を選び、どのような観点から教えればいいのか、教師が参考にできる具体的な資料が少ないことも一因であろう。本稿では日本語教育の現場で文学作品がどのように用いられてきたか概観し、文学作品の教材としての有効性を検討する。さらに、芥川龍之介の「羅生門」の教材化を試みる。

2. 日本語教材としての文学作品の可能性

具体的にどの作品がどのように教材化され、授業で用いられてきたか、先行研究をもとに文学教材としての可能性を検討したい。三門(1995, 2003)は宮沢賢治の「注文の多い料理店」を中級の学生に対して用いて、読みだけでなく、テープやアニメーションビデオを組み合わせ、見る、聞くといったほかの技能も合わせて高める工夫をしている。岡本(1998)は辻仁成の長編小説『母なる風父なる時代』を授業の主教材に用いて、学習者による音読やグループによる発表を通して、総

合的な読解能力を身に付けさせる取り組みをしている。半田(2000)は鈴木三重吉の「桑の実」と志賀直哉の「大津順吉」の2つの恋愛小説を教材に用いて敬語指導をする取り組みを行っている。さらに2つの作品を対比させることで作品の文体の違いに気付かせる取り組みもあり興味深い。また、落合(2001)は、志賀直哉の小説の冒頭構成を作文教育の文章モデルとして用いて、作文教育に取り入れている。その他、樋口一葉の「十三夜」を教材化して作品が書かれた時代の社会事情を学ぶテキストとして用いる試み(吉田・山本 1994)、志賀直哉の「城の崎にて」を視点移動や繰り返しに着目して読み進めていく試み(吉田・山本 1995)、佐多稲子の『水』を教材とした読解授業の授業報告(董・三上 2003)など多数ある。

これらの授業報告や教材化案を概観していくと、一口に文学作品の教材化といってもそれぞれの作品によって教材化の観点が異なり、教える内容や教え方も一様でないことがわかる。言い換えれば、どの作品を選ぶかで何が教えられるかが決まるといえる。岡本(1998)が教材選定にあたり、「数冊の小説に絞り込んでも一長一短であり、読めば読むほど教材としての価値があるかどうか迷った」と述べているように、学習者の日本語レベルに合い、学習効果があり、なおかつ学習者の学習意欲を高める作品を選ぶのは容易なことではない。むしろすべての要求を満たす作品を探し出すのは不可能に近いといっているだろう。教師に必要なのは、その作品で何ができるかできないかを見極め、教材化する目的を絞り込む勇気であるように思う。

3. 日本語教材としての「羅生門」

本稿では教材化テキストとして芥川龍之介の「羅生門」を選んだ。関口(1999)は国語教育における「羅生門」の教材化の意味について、「第一はこれが完成度の高い短編小説だということにある」と述べ、さらに、近代小説にふさわしい構成を持ち小説とは何かの学習に適していること、古典と近代文学のかかわりを考えるのに適していること、文学言語の学習に適切な素材であること、ことばや文章・文体などの学習が成立すること、学習者の問題意識を喚起させ批評意識の養成に役立つこと、の6点を挙げている。これは国語教育における教材意義であるが、日本語学習者にも共通する点が多い。関口の6つの意味を参考にしながら、日本語教育における「羅生門」教材化の意義を考えてみる。

まず第1はやはり完成度の高い短編小説だという点である。これは母語話者でも非母語話者でも共通するが、特に日本語の文章を読むことに時間のかかる非母語話者にとっては作品の長さは重要な要素となる。授業時間の制約の中で完結した形で扱うことのできる短編小説は魅力である。長編小説の一部を切り取って教材化することもできるが、それでは作品全体の構成を見ることができない。「羅生門」は起承転結の構成をとっており、段落構成を考えさせることが比較的容易である。その構成は入念に練られたものであり、細部の描写も推敲の末に完成された作品である⁽²⁾。

第2に学習者の動機付けの問題がある。「羅生門」は高校の国語のテキストとして広く採用され

ており、現在の高校への進学率を考えると、日本人の大半が読んだことのある小説であるといえる。読んだことがなかったにしても、芥川の「羅生門」を知らない日本人はそう多くはないだろう。いわばこれは日本を代表する文学作品の一つといえよう。そういった作品に触れることは、日本文化や日本事情を知るうえでも重要である。文学作品を読む場合、特に「教材を学ぶ」のか「教材で学ぶ」のか議論されることが多いが、「羅生門」に限っていえば、教材を学ぶことに徹しても教材としての価値があるのではないだろうか。「羅生門」は上級学習者にとっても決して読みやすい作品とはいえない。しかし読みにくいからこそ、授業で取り上げる価値があるともいえる。学習者に「羅生門」を読んだという自信を持たせ、作品の面白さや価値に気付かせることが、他の作品を読む意欲を高めていくことにもつながるのではないだろうか。

第3に多様な読みができることである。イーザー（1982）の読者論を持ち出すまでもなく、文学作品を読む醍醐味は読者自身による意味の構築にある。「羅生門」はさまざまなレベルで読者を刺激し、読者の積極的な係わりを誘う作品であることは「羅生門」に関する研究論文が300近くあるということからも明らかである⁽³⁾。学習者一人一人が自分自身の読みを追及し、それを他者の読みと比較検討することで、さらに個人の読みを深めることができる。他者の読みとはクラスの仲間の読みであっても、300近くある研究論文から得られる読みであってもよいが、「羅生門」の場合、研究者がどのように読んできたのか学ぶことで、学習者の読みを刺激し授業を活性化することが可能になる⁽⁴⁾。「羅生門」の持つ魅力が多くの研究を生み、それらの研究成果がより「羅生門」を魅力のあるものになっている。

以上3点について「羅生門」を教材化する意義を述べた。先に述べたように一つの教材に絞り込むのは他の教材でできることをあきらめる決断が必要になる。例えば、やさしめの文章で書かれた小説を各自が楽しみながら読み進めるといような活動はこの作品では不向きであろう。「羅生門」を用いてできることできないことを踏まえながら、どのような「教材化」が可能か考えていきたい。

4. 作品をいかに読むか

4.1 三読法と一読総合法

学習者にどのように作品を読ませるとよいであろうか。具体的にいうと、作品を自宅で各自読んでこさせるのか、授業で読むのか、また全部一度に読むのか、部分部分に区切って読むのかといった問題である。学習者が作品に出会う場をどのように設定するかは、学習者の作品に対する姿勢や印象を形作る上で重要になる。

日本の国語教育における文学作品の読み方を参考にすると、主に二つの読み方に分けることができる。一つはいわゆる三読法と呼ばれる「構造よみ」「形象よみ」「主題よみ」という三段階の読みを行う方法である。もう一つは一読総合法と呼ばれ、「三読主義」の否定の上になって提唱された指導法で、一文一文を最初から丁寧に読んでいく指導法である⁽⁵⁾。

4.2 「羅生門」の読み進め方

「羅生門」のようにページ数の少ない短編小説の場合はどちらの手法をとることもできる。しかし日本語学習者を対象として「羅生門」を扱う場合、一読総合的な手法を用いたほうがより効果的であると考えられる。その理由は主に2点である。まず、非母語話者にとって聞きなれない語彙が多いため、作品世界に入りにくいことがある。例えば、小説の冒頭部分「ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた」この部分に用いられている「暮れ方」「下人」「雨やみ」という単語は漢字から意味の見当はつくにしても学習者が初めて目にする言葉であろう。この文章をまず理解すれば、物語が展開する時間と登場人物と場所が示されているため、ぐっと作品に入りやすくなる。この作品の題名でもある羅生門が平安京の表玄関に建てられた、2階建ての立派な門であることもこの時点で説明をする必要がある。

第2点として挙げられるのは、この作品が謎解きのように展開している点である。具体的に見ていくと、読者は冒頭に続く文で、「広い門の下には、この男のほかには誰もいない」ということを知る。さらに、「ただ、ところどころ丹塗のはげた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている」と続く。一匹のきりぎりすの存在が人気のなさを強調している。学習者は表玄関に建てられて賑わっているはずの羅生門に人影がないことに違和感を覚え、「なぜ人がいないのか」という問いを当然のごとく持つ。語り手は「もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない」とたたみかける。そして次の段落で「なぜか」と続け、読者の持つ問いにすぐさま回答を示している。その理由というのはこうである。「ここ二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いがつづいて」荒廃しており、仏像や仏具までが薪の料にされているような状況で、羅生門には盗人か引き取り手のない死人ぐらいしか寄り付かず、「誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまった」のである。これで最初の疑問は解決した。しかしさらなる疑問が生じる。ではなぜ「下人」は誰も近づかないこの場所でしかも薄暗い時間に雨がやむのを待っていたのだろうか。こうした問いは読み手が意識するかしないかにかかわらず、抱くものである。こうした「なぜ」が作品を読み進める原動力となるのであり、登場人物への興味をかりたてるものである。「羅生門」を読むにあたり、一読読みの要素を取り入れたい理由はここである。作品の中に用意されているこれらの「なぜ」を意識化させ、作品世界に入りやすくしたいためである。意識化させるために、時にはクラス全体で「なぜ」の答えを予測しながら読んでもいいだろう。『羅生門』の語り手はこれらの「なぜ」にじらすことなく答えている。第2の「なぜ下人はこんなところにいるのか」という問いは次の段落を読めば、ある程度理解できる。下人は四、五日まえに暇をだされており、行くところがなく途方にくれているのである。

一読総合読的な読みというのは、「次にどうなるのだろうか」という気持ちで読み進めていくには効果的である。一度読んだあとは読み返せば読み返すほど新たな疑問や解釈の広がりを見出すのが羅生門の難しさであり、面白さである。考えつくされた物語の構成やその構成が作り出す意味

を考えていくにも、まずは一読総合的な方法でよみ、その後は3度といわず何度でも読み返してもらいたい作品である。短編であるために読み返しも比較的容易である。

5. 作品から何を学ぶか

5.1 語彙

文学テキストには難解な語彙や当て字など日本語母語話者でも難しい語彙・漢字が使用されている。日本語学習者にとって新出語彙が日常語彙であるのかそうでないのかを判断することは難しい。学習者が語彙の学習に必要以上に時間を費やすことがないようにするためには、単語リストが必要になる。その場合、単語に印をつけるなどして、現在では使われない語彙であることを示すとよい。また「唾」などのように現在は通常使うべきでない語彙が使われている場合もある。学習者がその言葉が差別的な用語であることを知ることも重要であろう。さらに語彙指導の際に重要となるのが、一つの単語が持つイメージである。例えば動物や色一つとっても文化によって、それぞれの持つイメージが異なることもある。羅生門では物語の初めの部分で、何度となく「鴉」が登場する。鴉によってかもし出されるイメージは何か、また「きりぎりす」から連想する季節はいつかというように、単語がもつイメージを考えていくことが重要である。鶴田(1999)はイメージ語(感覚表現)として、「鴉」「きりぎりす」「雨」「夕やみ」「夜」「にきび」などが負のイメージ(不気味さ・不快感)を伴っており、特に「夕やみ」や「にきび」は「下人」の心の不安定さを暗示し、「鴉」「雨」「夜」は陰湿な悪のイメージを呼び起こすと述べている。

5.2 文型

「羅生門」には多くの上級文型が含まれている。日本語能力試験でいうなら、1級レベルの文型も多い。いくつか例を挙げると「盗人になるよりほかにしかたがない」、「雨の音を、聞くともなく聞いていた」、「唾のごとくだまっていた」、「人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」(下線筆者)。テキストを理解するためには文型の知識が必要となるが、ここでは文型を使った作文の練習などは避けたい。文型を練習することが主な目的とするのならば、「羅生門」のような難解なテキストをわざわざ選んで行う必要はないからである。そのような練習をすれば、何のためにこの作品を読んでいるのか、学習者を混乱させてしまうことになる。文型が文学テキストの中でどのような使い方をされているかに着目していきたい。例えば、「雨の音を、聞くともなく聞いていた」の「ともなく」は『日本語文型辞典』(くろしお出版)によると、「人間の意志的な行為を表す動詞を受けて、その動作がはっきりした意図や目的なしに行われている様子を表す」とある。学習者はすでに「行き所がなく、途方にくれていた」下人が、にきびを気にしながら、「どうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考え」をたどっていることを知っている。その背景を知っていることで、「雨の音を、聞くともなく聞いていた」様子がより鮮明なものとして浮か

んでくる。

5.3 比喩表現

「羅生門」には多くの比喩表現が使われており、作品のイメージの形成に大きな役割を果たしている⁽⁶⁾。喩えているものがどのようなイメージを持ち、喩えられた結果どのような効果を生んでいるのか、丁寧に見ていく必要がある。羅生門の死体の描写では「土を捏ねて造った人形のように」「唾のごとくだまっていた」と表現されている。「人形」という物に喩える一方で、「唾のごとくだまる」と生きているかのように描写されている。物体とも人間とも見られる死体を前にした戸惑いを感じられる。老婆に関する描写では「猿のような老婆」「猿の親が猿の子のしらみをとるように」「鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である」「まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目でみた」「鴉からすのなくような声」「臺ひまのつぶやくような声」など、執拗に動物に喩えられている。こういった描写から老婆が人間的な理性や社会的な規範といったものとは対極の世界にいる存在であることが強調されているといえよう。

6. 事実の確認と解釈

読解の授業でよく行われるのが事実確認の質問である。例えば、ある新聞記事を読んで、いつどこで誰が何をしたのかを学習者に問い、内容を理解しているのか確認する。文学テキストの場合、この作業は必ずしも単純な作業ではなく、また確認しただけでは不十分である。「羅生門」の場合を検証する。

- ・ 時間はいつか：暮れ方。これは冒頭の一文「ある日の暮れ方の事である」からわかる。
- ・ 季節はいつか：はっきりと述べられてはいないが、「きりぎりす」「もう火おけがほしいほどの寒さ」から秋であることが推測される。
- ・ 天候はどうか：雨。「雨やみを待っていた」から明らかである。
- ・ 場所はどこか：「羅生門の下」、「京都」

物語が展開する状況設定の基礎的事実は確認された。ではこれらから何が読み取れるであろうか。暮れ方とは昼から夜へと変化するときである。秋も夏から冬への変化の季節である。石永 (2004) は暮れ方と秋を時間的境界にあるとし、陰と陽とが入り混じる両義的な境界上にあると指摘している⁽⁷⁾。また、松本 (1993) は羅生門について、平安京における洛中と洛外、秩序と混沌、生と死、日常と非日常の境界にあるとして、その「門」としての機能に着目している。また関口 (1999) は「テキスト『羅生門』は、羅生門という〈境界〉をいかにして通り抜け、別世界に入るかの物語なのである」と述べている。日本語学習者に研究者レベルの解釈を要求することは難しい。その場合、「門とはどういうものか？」というような問いを学生に向けることから始めてもよいだろう。学習者に「門」という単語の意味を答えさせるためではなく、「門」を解釈する自由があることに気付

かせるためである。

登場人物はどうだろうか。最初に登場するのは下人である。この下人が四、五日前に主人から暇をだされて途方にくれていることは本文から明らかである。では年齢はどのぐらいだろうか。登場人物を思い描くには老人なのか、子供なのか、中年か若者かある程度見当をつけたいものである。この下人は「右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた」とある。きびは下人の様子を叙述するのに他に3度用いられている。このきびから下人がまだ若い男であることが想像つく。下人もまた青年期という子供から大人への境界にあると読むこともできるであろう。

登場人物を対比させて見ていくことも人物理解の上で有効である。下人と老婆を対比させながら確認していくと、年齢や性別のほか、さまざまな点で対比できることに気がつく。羅生門の下で、下人は生きていくためには盗人になるよりほかはないと知りながらもそれを肯定する「勇気」がだせずに悩んでいる。一方で老婆は羅生門の上で、慣れた手つきで死体から髪を抜いてそれを生活の糧にして生きている。四、五日前に暇を出されたといっても下人は今まで社会規範の中で生きてきた人間であるが、老婆は「仏像や仏具を打ちくわいて…たきぎの代に売っていた」そんな日常の秩序が崩壊した世界にすでにいるのである。その2人が羅生門の上で出会い、下人は老婆の着物を剥ぎ取って去っていく。単純なプロットであるがそれゆえに、作品を理解するには場面や人物考証を丁寧に行うことが不可欠である。作品理解とは事実を確認するだけに留まる受身的な理解ではなく、読み手自身が解釈していこうという読みへの積極的な参加に基づいた理解である。

7. 読みを深めるために

鎌田（1999）は国語の授業の活動として、「羅生門」を読んだあとに、「読後感とその根拠」「腑に落ちないこと、気になるところ、疑問点」、「印象に残った表現」の3点について書かせている。「腑に落ちないこと、気になるところ、疑問点」の主なものとして、「下人の心理がコロコロかわること」「ラストの一行がすっきりしない、下人と老婆のその後が気になる」「下人が何度もきびを気にすること」「sentimentalismeとフランス語がでてくる」など12項目ほど例をあげている。スコルズ（1999）は文学作品の解釈に関して「この活動は読むことの失敗から生ずる」と述べているが、読み手が腑に落ちないと感じたり、釈然としない何かを感じたりするときに、積極的に意識的な読みが始まるといえよう。学習者に腑に落ちないと思うことを挙げさせて、それを他の学習者はどのように読んだか話し合うほうが、漠然とした感想を述べ合うよりもテキストに根拠をもった話し合いができよう。

上述のようにクラスでのディスカッションでお互いの読みを深めていくことが理想であるが、それだけで不十分な場合は教師が話題の提供をしてもよいだろう。例えば、「暗い羅生門」と「明るい羅生門」論を取り上げる。以前は芥川自身の自死という事実もあいまって「羅生門」は人間のエ

ゴイズムを描いた「暗い」作品だという受け止め方が主流だった。しかし近年では杉本(1989)が「この物語は主人一下人の関係を転倒させる物語、下人がおのが生の〈主人〉公となる物語である」と述べているように、下人の行動を肯定的に捉える見方もある。さらに、杉本は「下人が京都の町で最初に強盗をはたらく最もふさわしい場所は自分を失職させた主家いがいにはない。そのとき下人は名実ともに下人でなくなるのである」として、「羅生門」の末尾の一文である「下人の行方は、誰も知らない」の後の物語にも言及している。杉本のこの「羅生門」のその後から出発して、下人はどうなったか(または老婆はどうなったか)議論または作文の形で論じてもいいだろう。

8. まとめと今後の課題

本稿では「羅生門」の教材化を試み、日本語教育における「羅生門」教材化の意義、作品の読み方、学習内容、読みを深める活動について提案を行った。中上級の日本語授業では各教師がそれぞれ工夫を凝らして文学作品の教材化に取り組んでいるが、その教材化案や授業報告は決して多いとはいえない。今後さらに、どの作品から何を学ぶことができるのか、また有効な指導案はどのようなものか教材化を試み、授業の場での実践を通してその有効性を検証していきたい。

注

- (1) 文学教材が他の教材と異なる点として、文学テキストの表現の意外性、意味の不確定性、また読者による意味の構築作業などが挙げられる。詳しくは池田(2004)参照。
- (2) 「羅生門」には多くの下書きメモや断片草稿が残されており、入念に構想が立てられている。詳しくは関口(1999)参照。
- (3) 関口(1999)『「羅生門」を読む』の文献表では251文献が記載され、1999年以降も多数の論文が発表されている。
- (4) 鳴島(1993)は高校生と大学生を対象とした調査で、「羅生門」が一読した程度の読みにおいては、それほど多様な読みをみせておらず、感想を読みあったり話し合ったりするだけでは不十分であることを指摘している。
- (5) 三読法と一読総合法の比較は藤岡・安部(1995)に詳しい。
- (6) 高橋(1996)は市女笠や揉烏帽子などの「換喩」といわれる比喩表現にも言及して、その効果について述べている。
- (7) 石永はさらに雨に関しても述べ、天と地の境界としてとらえている。

参考文献

- (1) 芥川龍之介 (1981) 「羅生門」『日本の文学 5 鼻・杜子春』金の星社
- (2) 池田庸子 (2004) 「外国語教育における文学教材の役割」『茨城大学留学生センター紀要』2号 25-33
- (3) イーザー, W. (1982) 『行為としての読書』轡田収訳、岩波書店
- (4) 岡本佐智子 (1998) 「上級文章表現授業への試み—リーディング：一冊の長編小説を主教材として—」『日本語と日本語教育』26号 55-72
- (5) 落合由治 (2001) 「日本語作文教育のための文章モデル確定について—志賀直哉の小説の冒頭構成から—」『安田女子大学大学院文学研究科紀要』7号分冊19 91-109
- (6) 鎌田均 (1999) 「〈新たな倫理性〉を求めて—『羅生門』の授業をめぐる田中理論に学ぶ—」『日本文学』48 11-21
- (7) 杉本優 (1989) 「下人が強盗になる物語—『羅生門』論—」『日本近代文学』41 27-36
- (8) スコールズ, R. (1999) 『テキストの読み方と教え方』折島正司訳 岩波書店
- (9) 関口安義 (1999) 『「羅生門」を読む』小沢書店
- (10) 董英玉・三上勝夫 (2003) 「日本語学習者に対する文学作品の読み方指導の研究」『北海道教育大学紀要』54巻 1号 1-12
- (11) 鶴田清司 (1999) 『文学教材の読解主義を超える』明治図書出版
- (12) 鳴島甫 (1993) 「生徒の多様な読みを整理するための基礎研究—『羅生門』を例として—」『筑波大学学校教育論集』16巻 159-170
- (13) 半田淳子 (2000) 「敬語に関する調査と恋愛小説を教材とした敬語指導の試み」『東京学芸大学紀要 2 部門』51号 95-103
- (14) 藤岡信勝・安部昇編 (1995) 『文学教材の指導法—読み研方式—読総合法新分析批評の徹底比較—』学事出版
- (15) 松本修 (1993) 「媒介としての門—羅生門の研究—」『日本文学研究資料集19芥川龍之介：理知と叙情』有精堂
- (16) 三門準 (1995) 「文学作品の教材化—宮沢賢治『注文の多い料理店』を例に—」『日本語教育研究』30号 135-145
- (17) 三門準 (2003) 「視聴覚的手法を用いた文学教材の利用」『日本語教育研究』45号 1-12
- (18) 吉田正信・山本雅子 (1994) 「日本語教材としての短編小説—樋口一葉『十三夜』教材化の観点と構想—」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』18号 137-144
- (19) 吉田正信・山本雅子 (1995) 「日本語教材としての短編小説—志賀直哉『城の崎にて』教材化の観点と構想—」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』19号 247-254